

○南部菱刺し

寄贈文化財：(仮称) 田川コレクション 員数 33 点

令和2年12月22日 新郷村出身者(現：十和田市在住)より下記のとおり33点の野良着というべき県南農民の野良着が寄贈されました。教育委員会は、以下のとおり寄贈品の概要と文化財審議委員による調査結果について、収集者が重要品とした4点のみ公開いたします。

(仮称) 田川コレクション (全33点の概要)

No.	収集者の付した名称	収集地 (町村名は収集時の名称)	収集年	備考
1	菱前かけ (三幅) 重要品	五戸町地方(大正初期)	昭 55. 6. 17	菱刺前だれ(色)も記す
2	ののかたたつけ 重要品	東北町字甲地	昭 55. 2. 20	菱刺たつけの名も記す
3	ののかたたつけ 重要品	七戸町地方	昭 56. 2. 20	菱刺たつけの名も記す
4	ののつづれかたざし着物 重要品	上北町地方	昭 58. 10. 13	菱刺肩ぬのつづれも記す
5	ののつづれ みちか(短着)			
6	つづれ 1点	三戸町斗内字檜館	昭 55. 12. 11	
7	つづれ(作業着)	七戸町荻ノ沢	昭 56. 1. 16	
8	つづれ?かすりとしまのミックス			
9	ののかたたつけ	六戸町大字犬落瀬字金矢	昭 55. 12. 10	「ののたつけ」も記す
10	ののたつけ	天間林村字啗後平	昭 55. 12. 10	
11	ののかたたつけ	天間林村字啗後平	昭 55. 12. 10	「ののたつけ」の表示
12	のの地さしたつけ	七戸町天神林	昭 56. 1. 28	
13	木綿地さしたつけ	東北町	昭 56. 2. 12	
14	木綿地さしたつけ	東北町字乙部	昭 56. 2. 12	
15	木綿地さしももひき(男子用)	東北町	昭 62. 6. 10	
16	こしきり			
17	こしきり?夏用?菱刺型染め			
18	こしきり?ぶっちゃき?みちか?	新郷村(旧戸来村)	昭 61. 9. 24	
19	こしきり?ぶっちゃき?みちか?	新郷村(旧戸来村)	昭 61. 9. 24	
20	まかない	十和田湖町		
21	まかない	十和田湖町大字下洗	昭 55. 12. 9	
22	まかない			
23	ぶっちゃき?			収集者が好んだ品。長年飾り、変色あり
24	ぶっちゃき?かすりのパッチ			
25	ぶっちゃき?かすり1種			
26	ののつづれ そでなし			
27	そでなし	六戸町字上吉田		
28	そでなし かすり模様3点			
29	そでなし かすり模様			
30	そでなし かすり模様			
31	そでなし (かすり模様)			
32	そでなし (かすり模様)			
33	そでなし (かすり模様)	上北郡字上野		

・収集地等の記述は、保存していた入れ物袋等の記述によったものである。

# 1 菱前かけ（三幅）（菱刺前だれ(色)）

- ・ 収集地 五戸町地方(大正初期)
- ・ 寸法 三幅の縦 72cm・下横 96.5cm、菱刺し部分縦 72cm・下横 30cm  
紐の長さ 233cm・幅 6.5cm、重さ 414g
- ・ 素材 麻布・色毛糸・綿布

三幅の前掛けの中央部に、幅 30cm 浅葱色の麻布に毛糸で<べこのくら>の型刺しを施したものを、両側には花色木綿と呼ばれる濃紺の木綿地を縫い合わせている。

中央部は「フシマイ（菱前）」と呼ばれ、さまざまな色相の毛糸が用いられる。赤、水色、オレンジ、紫、桃、白、黄、緑、赤紫など9色を数えるか。<べこのくら>には少しずつ変化した型・模様が見られ、6種類を目にすることができる。型刺しの<べこのくら>の配色、大きな横菱の両脇の<あやすぎ>の地刺しの配色など、とても工夫された色使いである。

両側の花色木綿の、それぞれ左右と下側には、赤青2色の毛糸により、端から1cm強を隔て、縁を取るように刺しゅうされ、しゃれた雰囲気醸す。

袋状の腰紐を縫いつける時は、花色木綿では中心部でタックをとり、中央部の布は幅を狭めて紐と縫い合わされている。

下部の菱形の下半分は特に手の込んだ菱刺しが施されている。この前掛けは菱刺しの華というべき逸品である。



(令和4年1月撮影)

## 2 ののかたたつけ（菱刺たつけ）

- ・収集地 東北町字甲地
- ・寸法 股上前 38cm・後 49cm、股下 44cm、前布幅 38cm・後布幅 31cm  
前紐の長さ 182cm・後紐の長さ 105cm・重さ 386g
- ・素材 麻布・綿布・木綿糸

型刺しといわれる菱刺し模様のあるたつけである。

脚部から前布にかけて、最下部の紺木綿糸によるつづれ刺しに始まり、その上には6段の型刺しが見られる。型刺しの名称は、<うろこもん><べこのくら><うめのはな>などである。型刺しの上には2段の地刺しがあり、麻布の浅葱色が隠れるほど紺と白の木綿糸によって刺し綴られている。

前紐中心の腹中央部にあたる位置に、幅1cm、径3cm弱の輪状の紐を縫いつける。輪の中に前後の紐を通して前布を擦り下げないためだろう。

後布には、8段のつづれ刺しが紺と白糸により交互に重なる。

前布と後布は、裾から高さ51cmの位置で割れている。

県南の菱刺しは、下肢へ身につける着物では世界で最も手の込んだ手仕事であると評価される。県南の農作業はいかほど困難なものであったのかと胸が痛む。



(令和4年1月撮影)

### 3 ののかたたつけ（菱刺たつけ）

- ・ 収集地 七戸町地方
- ・ 寸法 股上前 26cm・後 34cm、股下 54cm、前布幅 38cm・後布幅 24cm  
前紐の長さ 194cm・後紐の長さ 114cm・重さ 380g
- ・ 素材 麻布・綿布・木綿糸

前布を見ると緻密な木綿糸の刺し子に驚かされる。後布の両脇を縫う拵を目にすると、ほっとした気持ちになる。前布を見ると、型刺しなのか地刺しなのかと迷うほど、全面が刺し綴られている。地刺しととらえよう。

前布を見ると、裾から前紐までの間に9段の地刺しの模様が見える。まち上部の後布には、後紐までの間に6段のつづれ刺しを確認する。

前布と後布は、裾から高さ44cmの位置で割れている。

裏地を見ると、脚部と前布には柄入りの白木綿をあて、5～7cm幅に縦に刺し子をする。後布は柄の白木綿をあてて、3～6cm幅に縦に白木綿糸で刺し子をしている。まちと股下には、どちらも青色木綿をあてている。

寒さの厳しい県南では股引が不可欠であり、たつけは女性用の股引である。地刺しなどの模様は、自然の厳しさに立ち向かう女性の粘り強さから生まれたものであろう。



(令和4年1月撮影)

#### 4 ののつづれかたざし着物（菱刺肩ぬのつづれ）

- ・収集地 上北町地方
- ・寸法 衿66cm・丈92cm・重さ532g
- ・素材 麻布・綿布

この作品名「ののつづれかたざし」とは、「型刺しの菱刺し模様のある麻布（のの）でつくった着物（つづれ）」となる。

肩下38cmまで衿幅6cmの濃紺の半衿がつき、前身左右には幅21cmの黒木綿布が半衿下端とそろい、付く。左右の裾には21cmのスリットがつき、前身・後身の裾は濃紺綿布で縁取られる。前身からでる袖幅19cmは型刺しの麻布であり、その先には17cmの黒綿布がつながり袖となる。型刺しは<べこのくら>と分かるが、縦長の菱型であることから、苦勞の末に完成した作品と予想される。<べこのくら>には大きさが異なるものがあり、また左腕の中央部には名称不明な型刺しが見られる。

裏地は、前身・後身・両袖まで目の粗い白木綿を合せている。後身の丈92cmの中に121本のつづれ刺しを確認する。狭い部分は0.6~0.7cm間隔、広くても1cm強の間隔で、丁寧さを実感する作品である。



(令和4年1月撮影)

## 調査に係る参考文献

- ・昭和 53 年 盛田稔著「近世青森県農民の生活史 2 版（青森県立図書館郷土双書 第 10 集）」
- ・平成 21 年 田中忠三郎著「図説みちのくの前布の世界」
- ・昭和 51 年 青森県立郷土館編「刺しこぎんと菱刺：津軽・南部の仕事着」
- ・平成元年 倉石村史編纂委員会編「倉石村史 下巻」
- ・昭和 49 年 横島直道編著「津軽こぎん」
- ・昭和 52 年 田中忠三郎著「みちのく民俗散歩」
- ・昭和 55 年 八田愛子、鈴木堯子著「菱刺しの技法：伝統の模様から現代作品まで（新技法シリーズ）」
- ・昭和 53 年 高橋九一著「むらの生活史」
- ・平成 26 年 NHK 出版編  
「にっぽんの布を楽しむ：訪ねて・ふれて・まとう（NHK テレビテキスト 趣味 Do 楽）」
- ・昭和 44 年 五戸町誌刊行委員会「五戸町誌 下巻」
- ・平成 13 年 青森県史編さん民俗部会編「青森県史 民俗編 資料南部」
- ・昭和 51 年 十和田市史編纂委員会編「十和田市史 下」
- ・平成 5 年 六戸町史編纂委員会編「六戸町史 上巻」
- ・昭和 57 年 十和田地区農業普及改良所編著「むかしのくらし」
- ・昭和 40 年 盛田稔著「七戸の文化財」
- ・平成 19 年 米田清蔵監修「むかしのくらし - 上北地方農漁村文化風俗イラスト集 大正～昭和初期 - 」
- ・平成 6 年 東北町史編纂委員会編「東北町史 下巻 2」
- ・平成 22 年 青森県史編さん文化財部会編「青森県史 文化財編 美術工芸」
- ・鈴木堯子著「南部ひしごし」（昭和 61 年 『民藝』編集委員会編「民藝 第 399 号」中より抜萃）
- ・鈴木堯子著「菱刺しとこぎん考」  
（昭和 57 年 青森県文化財保護協会「東奥文化 第 53 号」15 項～23 項抜萃）
- ・昭和 56 年 東奥日報社「青森県百科事典」
- ・平成 19 年 西野こよ作「西野こよ南部菱刺し」
- ・相馬貞三著「雪の炉辺に刺す」（平成 22 年 金光章編「民藝 第 693 号」中より抜萃）
- ・平成 9 年 六ヶ所村史編纂委員会編「六ヶ所村史 下巻 2」
- ・平成 9 年 東通村史編集委員会編「東通村史 民俗・民俗芸能編」

○民俗伝承資料室展示物

密銭鑄造溶鋳炉（坩堝）

遺跡番号 450003 大久保（2）遺跡出土品

天保時代、戸来村の贋金鑄造用の溶鋳炉（坩堝）と推定される。



溶鋳炉（外径 19cm・周り約 60cm・高さ 8～10cm・重さ 1,435g）

●以下、溶鋳炉と推定するにあたり参考とした文献及びその内容

鑄銭跡とされる。鉄銭鑄造以降（元文 4 年（1739）以降）に稼働した可能性が最も高いと思われる。

令和 3 年 青森県教育委員会「青森県埋蔵文化財調査報告書 第 618 集 戸来館遺跡」14 項より引用

天保 6 年 五戸通 戸来村 密鑄者 2 名 2 名追放

昭和 32 年 森嘉兵衛、板橋源著「近代鉄産業の成立－釜石製鉄所前史－」25 項〈密銭鑄造者処刑表〉より引用

「盛岡騒動記」に「文化年中の末頃より向通八戸領境山中にて鑄銭出来、追々能事と思ひ、文政年中に至りては、所々方々山々谷々は勿論、八戸領大野山（鉄山也）近辺福岡、三戸、五戸辺り夥しく鑄造し」と特記している。

同著 26 項より引用

（略）正規な銭座は一つもない。（中略）密鑄銭は鉄銭が大半であるが、銅鑄銭もある。（中略）文化、文政から長期に渉る連続の冷害、凶作による極度の通貨不足に苦しめられた時代に県北の密伝鑄銭が仮になかったなら、なお一層悲惨な世相を呈し、正視のできぬ郷土史が生れておったのではなかろうかと慄然とするものを感じる。

昭和 44 年 水原庄太郎著「南部貨幣史」69 項より引用